

大平和弘 研究員



劇場版が歴代興行収入1位になるなど、社会現象を生んだ漫画「鬼滅の刃」。その人気は海外にまで広がっています。大正時代を舞

ひとはく 研究員 だより

台に、鬼に家族を惨殺された主人公が、鬼と化した妹を人間に戻すため、仲間と共に鬼たちを倒す物語です。考えてみれば、日本の昔話にも鬼退治譚は数多く存在します。博物館の資料とともに振り返ってみたいと思います。

明治時代に来日した外国人のお土産として販売された、日本昔話の絵本『Japanese Fairy Tale Series』があります。和紙に多色刷の木版で挿絵を入れ、欧文を活版印刷し、ちりめん布のように柔らかい質感



余裕の表情で鬼を征伐する桃太郎(1885年、いずれも「Japanese Fairy Tale Series」より)

鬼退治譚 成立の背景に社会不安



頼光の兜にかみつく酒呑童子の首(1891年)

となる加工を施した和装本で「ちりめん本」とも呼ばれます。鬼や妖怪が登場する物語も多く、日本の鬼退治譚を海外に広く伝えた歴史資料の一つです。

「桃太郎」はその代表でしょう。由来については諸説あり、時代とともに物語

が変化していますが、明治期以降、桃太郎は悪を征伐する勇士、戦前から戦中は軍国主義の象徴として教科書に掲載され、広く普及された背景があります。

しかし、それ以前の中世から近世で最も語られていた鬼退治譚は、「大江山の

国との国境の大枝山)は都の北西に位置する街道の要であったことなどから、酒呑童子退治は疫病封じを意味した可能性も考えられます。

このように、歴史的にみて鬼退治譚は、疫病を含む社会の不安が鬱積した時代に成立する点において、鬼滅の刃の大ヒットとの共通点がみられます。また、鬼を退治する人物は、国民の模範として捉えられてきました。政府非公認の組織に属し、悲しい境遇の鬼たちにも慈悲深く接し、苦しい状況でも力強く生き抜いていく。そんな鬼滅の刃の主人公は、コロナ禍で混沌とした現代社会において強く求められる人物像なのかもしれません。

昔話として成立したのは社会が混乱に満ちた南北朝期とされ、都を脅かす存在を天皇の勅命により討伐するという、地に堕ちた王権の繁栄をたたえる王権神話として語られたものと考えられます。また、この討伐が行われた年が、都で疫病が大流行した995年であること、古来より疫病は大(西)からもたらされると信じられ、大江山(丹波